清末上海金融市場の形成における伝統金融機関山西票号の役割

蕭　文嫻

はじめに

天津・北京条約（一八五八年・一八六〇年）が締結されて以降、上海は次第に中国の最大の対外貿易・国内取引の中心地として発展していった。一八五八年、上海の対外貿易総額は六五六八万三〇〇〇海関両であったが、一九一三年になると、それが、四億二一三一万海関両にまで増大し、中国貿易の四割あまりを占めるようになった。

中国の国内金融は、複雑な通貨制度の下で、独特に構築されていた。清末の中国通貨制度は、雑種幣制と言われ、数え切れないほどさまざまな貨幣単位があり、商品によって、地域によって交換相場が異なる。地域間決済通貨は、外国貿易の増大に伴い、銀両を使用する地域に加えメキシコ・ドルを使用する地域が拡大し、いろいろな品位量目の銀錠を決済通貨とする地域とメキシコ・ドルを決済通貨とする地域が住み分けされるようになった。このような通貨制度の下で、上海は銀ドル・銀錠・金などの諸通貨の交換センターとして独特な機能を持っていた。上海の貨幣市場には、一九世紀を通じて中国の最大の輸出品である茶、生糸の出荷期においては高い資金需要が生じ、その季節的な資金需要の変動への対応が金融市場のあり方を大きく規定した。

銀の貨幣に対して国家による監督・管理はなく、また金融市場に関しても民間の金融機関によって自主的に運営さ

れている。一八六〇年代から辛亥革命が起きる一九一一年に至るまで、上海金融市場には、よく指摘されてきたように、対外為替分野を独占した諸外国為替銀行、国内諸地域間の決済を担う山西票号と上海中国商人に資金を融資する上海銭荘という三つの勢力がそれぞれの役割を担っていた。一八九四年頃、中国金融市場における外国銀行、票号と銭荘の資本力がほぼ同じであったという推論もある。(1)

貿易にかかわる貨幣供給において、銭荘同業者によって設立された短期金融市場が最も重要な役割を果たしていた。これまでの研究では、外国銀行による銭荘へのチョップ・ローンという短期貸付の供与のあり方をめぐって議論が重ねられてきた。(2)では、貿易金融に関して、山西票号が関わっていたのか、関わっていたとしたら、どのような役割を果たしたであろうか。これについてはほとんど研究が行われてこなかった。

山西票号を経営する山西商人は、安徽商人とともに中国の代表的な商人である。明末以来北部の辺境で商業活動を行い、清政権が成立した際には清政府の財政確立に貢献したことによって富が蓄積されたと知られている。(3)山西票号の最初の開設は、一八二〇年代であると言われている。最初の票号とされる日昇昌の前身は山西省平遙出身者によって経営される西裕成顔料店であった。顔料店の全国展開に伴い、地域間の送金需要が生じてきたことが山西票号の出現の背景である。(4)当時の山西票号の資本金は十数万両から三〇万両前後にすぎないが、その開設者が百数十万両の財産を持っているとされ、無限責任に基づいて行われていた中国の伝統商業では、山西票号が莫大な信用を誇っていた。票号の「票」とは、中国語で「手形」を意味する。山西票号は、送金業務と共に、預金・貸付業務を行っていた。預金は主に諸票号の本店がある山西省の平遙、太谷、祁県と北京で集め、長江流域や華南地域の諸都市を中心に貸付けを行う。(5)

山西票号の発展を見ると、大きく三つの時期に分けることができる。一八二〇年代から五〇年代は創設期であり、また一八六〇年から九五年までの時期は拡大期であり、さらに一八九六年から一九一一年に至るまでの時期は多くの危機に直面しながらも、隆盛を極めた時期であった。辛亥革命後、山西票号は衰退の道を辿った。内乱によって多くの損失を抱えた山西票号は支店網の整理を行い、否応なく業務の縮小をせざるを得なかった。

本来北部から経営を展開した票号は、発展に伴い、華北から華南まで支店網を張り巡らせ、開港場と共に内陸の都市に支店を持つようになった。一八五〇年に至ると、山西票号は本店が設置されている山西省のほか、中国国内の二四の都市に拠点をもって国内送金業務を展開していた。一八六一年、中国には一四の山西票号が存在していたが、一九一一年になると、山西省出身者以外によって経営されている三つの票号を含めて開設されている票号数が二六に上り、支店網は全国約九〇ヵ所にあり、その数は四〇〇以上に上った[6]。

山西票号の経営活動について、清政府、官僚との関わりや、官金の送金業務については比較的に多くの資料が残されたが[7]、民間送金・貸付業務について山西票号の経営史料が乏しかったという制約により、具体的にはほとんどわかっていない。本論文は、外国銀行の史料や上海で発行されていた英字新聞など[8]を利用してこれまで研究が空白となっていた山西票号の茶貿易金融との関わりについて考察を行い、上海金融市場の形成過程において伝統金融機関が果たした役割を究明したいと考える。

一　漢口の茶貿易

(一)　中国茶の輸出

アヘン戦争後、中国茶の対外輸出は広州の一港から五つの開港場で行われるようになった。それに伴い、輸出も急速拡大した。表1に示されるように、中国茶輸出は一八八〇年代前半にピークを迎え、世界市場でインドや日本の参入に伴い、激しい競争にさらされ、次第に輸出が減少した。また、「五口開港」の時代に伴い、茶輸出が広州以外の開港場にシフトし始めた。というのは太平天国の反乱（一八五三～六二年）によって、従来の国内の通商ルートが遮断されたからである。上海や福州などへの移転によって、産地（図1）と開港場間の距離も初めて短縮された。また一九世紀六〇年代になると、天津・北京条約の締結により、長江流域に三つの開港場が開かれ、茶は主に上海、福州及び漢口の三つの開港場で輸出されるようになった。上海は福州や漢口と同じように、産地から直接集荷するのではなく、むしろ九江、漢口及び寧波の再輸出港としての役割が大きかった[9]。

漢口は、一八六〇年代後半から一八八〇年代へかけての

輸出茶の最高潮の時期において、中国全体の茶輸出高のほぼ三分の一を占め、さらに八〇年代後半から九〇年代末において重要性を増していった。他の茶輸出港は八〇年代後半以降において茶の対欧米貿易に大きな打撃を受けたのに対して、漢口は高い水準の輸出高を維持した。というのは漢口は欧米市場以外にロシア市場に大きなシェアを持っていたからである。湖南省・湖北省で生産された茶は古くから漢口で集荷され、山西商人によってモンゴルに輸出され、のち、輸出先がロシアまで広げられた。

表1　中国の茶輸出年間平均高　（単位：1,000ピクル）

年度	広州	上海	福州	漢口	天津	中国全体
1843-45	408.7	12.7				
1846-50	406.6	137.2				
1851-55	258.8	395.4	63.4			
1856-60	202	340.2	284.8			
1861-65	185.6	440.6	454.4	233.2	14.6	1077
1866-70	88	621.8	538.6	390.2	72.6	1381.2
1871-75	95	621.6	648.4	517.6	109.2	1724.8
1876-80	115.4	466.8	684.4	572	269	1930.4
1881-85	117	515.2	698.4	660.8	303.4	2056.6
1886-90	91.8	521.8	610	746.6	412.2	2015.6
1891-95	27.4	453.4	465	734.8	442.6	1783.9
1896-1900	10.6	458.2	340.4	745.4	457.6	1559.3

出所：陳慈玉『近代中国茶業的発展与世界市場』pp.318-322より作成。

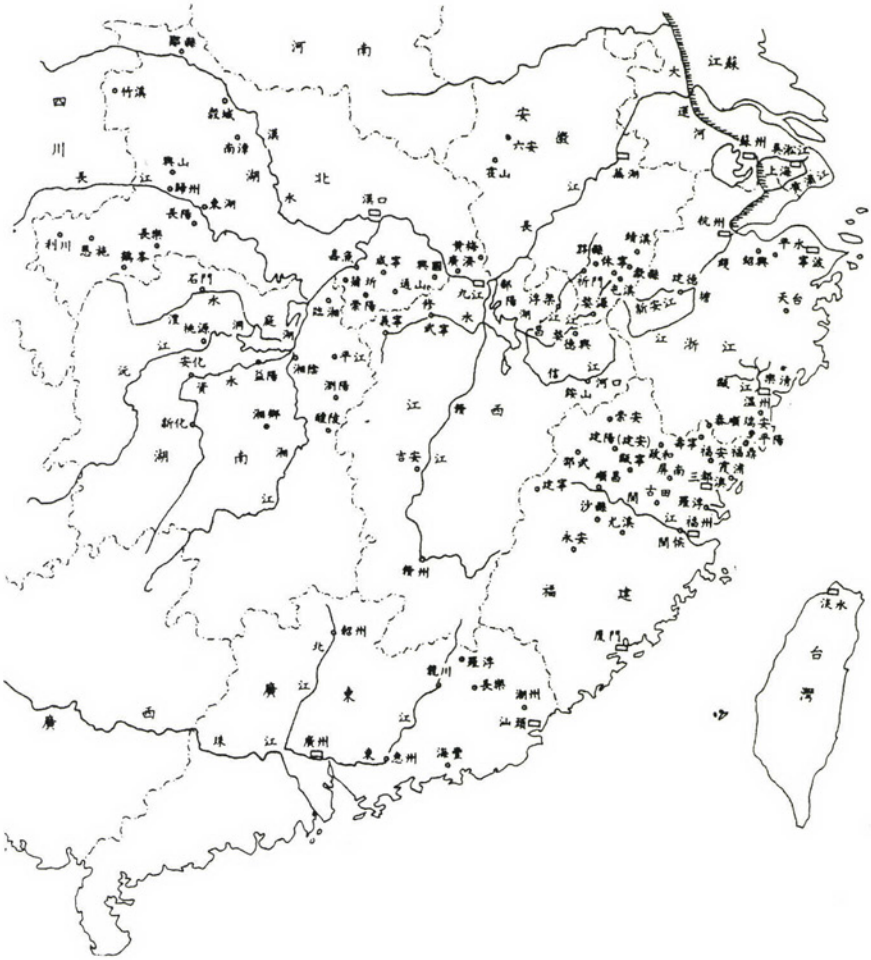
（2）漢口の対ロシア・モンゴルの茶貿易[10]

漢口は中国のほぼ真中にあり、長江と漢水の交差点に通じるところに位置している。長江は中国の沿海地域と西奥の内陸地を繋げ、漢水は北西部まで流れていたので、漢口は古くから中国の重要な商業センターであった。湖北・湖南両省の茶産地（図1）の大半は河川に近い所にあるので、漢口に運ぶのに便利であった。

清代初期、山西商人は対モンゴルへの茶輸出を独占した。当時彼らは、湖南・湖北茶を漢口で買い付け、漢水を利用して陝西省まで船で行き、そこから甘粛省を通って、対モンゴル貿易の中心地である張家口まで運んでいた。モンゴル茶貿易の延長線上に露清貿易が発展した。

露清貿易の開始は、一六八九年に両国間で締結されたネルチンスク条約に遡ることができる。一七二七年のキャフタ条約ではバイカル湖の南にあるキャフタとネルチンスク近くでの定期市での貿易を認めた。条約で定められた貿易地キャフタでの両国間の茶貿易は、一八世紀末に至るまではそれほど重要なものではなかったが、一九世紀に入るとヨーロッパ・ロシアにおける茶の需要が高まったことにより[11]、茶貿易が急速に拡大された。一九世紀半ばにおいて茶

図１　近代中国における茶生産地の所在図



凡例　○　茶の生産地
　　□　開港場

出所：陳慈玉『近代中国茶業的発展与世界市場』
中央研究院経済研究所、台湾、1982 年、p. vii。

は中国の対ロシア輸出の四割を占めている。

ロシアにおける茶需要の拡大に従い、資金の回収問題が山西省出身の茶貿易商にとってますます重要な課題となる。山西の茶貿易商人は大体において巨額の資本を所有していた。だが、少なくとも一八五三年までキャフタでの取引は物々交換で行われていたので、張家口での対モンゴル、ロシア貿易は、資金の回転に長時間を要する。そこに山西票号が入り込む余地が生じたと考えられる。そもそも山西商人と山西票号は密接な関係を持っており、山西票号の中には、茶貿易を同時に営む所もいくつかあった(12)。山西票号がいつ漢口に進出したかについて確かな資料はないが、一八五〇年代初頭には漢口はすでに山西票号の長江流域の重要な拠点であった。一八五三年に太平天国の内乱で一旦撤退したが、一八六一年に再び進出し、漢口での送金業務を独占しただけでなく、漢口の大商人や、伝統金融機関である銭荘に対して融資を行い、漢口金融において重要な地位を獲得した。後に見られるように、茶貿易商人は山西票号から茶の仕入れ地の送金手形を信用で買い入れ、茶が販売された後に手形代金の返済を行う。

一八六〇年の天津・北京条約の締結は、山西商人が従来独占していた対ロシア、モンゴルの茶貿易に大きな変化をもたらした。天津条約により、ロシアは通商に関して露清両国間の国境にある指定地のみならず、海路により入国することができるようになり、上海、寧波、福州、アモイ、広州、台湾府、瓊州府に入港することを認められ、欧米諸国並みの最恵国待遇を獲得した。さらに、北京条約によって、陸上貿易について追加条約が結ばれ、両国国境の両側百華里にわたる地域を免税地帯とし、モンゴルにおいてロシア商人が商業を営む際税金の免除を受ける権利が認められ、ロシアから陸路を経て天津に輸出したロシア貨物に対し一般海関税の三分の一を減額することとし、天津から陸路を経てキャフタに輸出する中国貨物は一般に規定される輸出税を支払った後は、それ以上の税は徴収されないこと、及び張家口で購入した中国貨物の輸出税は半額に減額するように定められた。

それまで中国の茶産地に近い開港場に入ることが許可されなかったロシア商人が、漢口で茶を買い付け、極東ロシア向けの、茶の粉末を型に入れて固めたレンガの形をする磚茶の製造を始めた。一八六四年、漢口でロシア商人が経営している茶貿易会社は九社に上った。一八七八年に至る

と、ロシア人によって開設された製茶工場は六つあり、そのうちの三つは製茶技術の向上を図るように蒸気機関が取り付けられ、茶が出荷された時期にやってきて簡単な加工を施す山西商人よりも品質の優れた磚茶を生産するようになった。漢口で生産された茶は汽船で天津まで運ばれ、そこから陸路でキャフタへ運送される。スエズ運河が開設された一八六九年以降、ヨーロッパ・ロシアへの輸出は天津からオデッサまで輸送された。ロシア商人は外国為替銀行を通じて貿易決済に関わる送金業務を行い、山西票号との関連は薄かったようである。[13]

ロシア市場だけでなく、モンゴル市場も彼らによって掌握されるようになった。一八五〇年代末期、張家口およびキャフタには山西商人によって経営される茶荘が二八あった。一八七〇年代末期に至ると、そのうちの三つだけが生き残り、多くの山西商人はロシア茶商人に対して運搬の仕事を請け負う役に転じざるを得なかった。[14]山西商人の凋落によって山西票号の露清茶貿易にかかわる茶票業務が不振となった。この変化は山西票号に対応を迫らせたといえる。それについては二節で検討する。

(3) 漢口の対欧米貿易

重田徳の研究によれば、湖南省・湖北省で生産された茶は、五口開港後における茶需要の拡大への対応として広東省出身の商人によって紅茶の製造法を教わり、買い付けられるようになった。さらに太平天国の内乱による影響で、広東商人がより広範囲の地域で茶を仕入れるようになり、紅茶の製造法が湖南・湖北両省でも定着するようになったのである。[15]

漢口の開港に伴い、多くの在華の欧米貿易商が相次ぎ漢口に進出した。しかし、彼らの最大の目的は輸入品である綿製品を漢口で売りさばき、漢口よりさらに奥の諸地域での輸入品の消費需要を把握して販売を拡大させることであった。ところが多くの中国人の卸商人は漢口よりも価格の安い上海で輸入品を仕入れたため、漢口での輸入品販売は早くも挫折してしまった。従って、在華の欧米商人にとって漢口は単なる茶を買い付けるための拠点となった。[16]

茶は年に三回ほど出荷されるが、漢口では最も品質の優れた一番茶がだいたい五月から六月にかけて、二番茶はその二ヶ月後、三番茶はその四ヶ月後に集荷される。従って、漢口での茶取引は遅くとも一〇月には終了することに

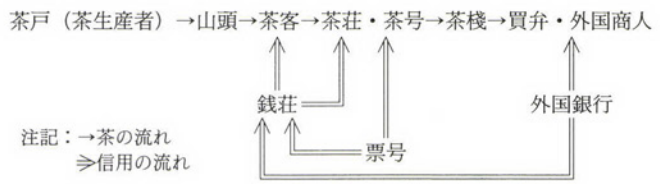
なる。[17]

多くの欧米商人にとって漢口での茶買付において一番茶の出荷期が最も重要な時期となる。というのは、ヨーロッパ・ロシアの上流階級が高級紅茶を好み、ロシアの在華貿易商が躊躇なく高い値段で買い付けるため、一番茶に対する需要が高かった。他方、二番茶、三番茶に関してはロシア商人からの競争があまりなかった。というのは、極東ロシア市場に需要があった磚茶は茶の粉末を原料にし、茶の出荷時期にはこだわらなかった。その結果、漢口で売れない二番茶、三番茶は、だいたいにおいて茶荘などの仲介商人の手によって、上海に運ばれる、そこで漢口より安い値段で売却される。六〇年代に上海と漢口の両地で同じ品質の茶をお互いに価格競争して購入した在華欧米貿易商は、ロンドンでの茶価格の下落を受け、中国茶商人の動きに合わせ、中級以下の茶を上海で仕入れるようにした。[18]このように、漢口の茶市場の存続はロシア商人の茶取引によるところが大きかった。

二　漢口茶貿易に関わる融資と国内送金

漢口に集荷された茶は、湖南省・湖北省を中心に、少なくとも五つ以上の省にわたる一九の茶生産地で生産されたものである。そうした茶産地は、中国のほかの茶産地と同じく、小農民の副業が中心である。その流通構造は図2に示される通りである。茶の生産者は茶戸と呼ばれている。茶戸は比較的富裕な農民である山頭の指導に基づいて生産を行う。初歩的な加工が施された茶は茶客あるいは茶荘といった茶仲買商人に販売される。漢口市場には茶客が数百以上存在しており、そのうちの大半は豊富な資金を持つ茶荘によって雇われたり、茶荘と提携関係を持っていたりしていた。茶荘の数は市場状況によって大きく変動し、最も多いときは二〇〇以上に上ったとされている。茶荘は茶を再加工して分類した

図2　中国茶の生産・流通過程

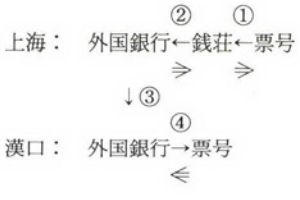


出所：William T. Rowe, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford University Press, 1984, pp. 134-136より作成。

後、茶輸出を仲介する茶桟に茶の見本を持っていく。一八六〇年代から二〇世紀初頭にかけて、漢口には約一〇から二〇の茶桟があった[19]。

茶の流通において、取引に関わる決済がどのように行われたであろうか。先の図2に見られるように、まず茶客と山頭間の決済は金融機関が介在していない。茶客は茶を買付ける際にその代価の三割以上を山頭に渡し、その残金は販売された後に支払うとなっている[20]。茶客、茶荘などは伝統的な金融機関である銭荘や山西票号から融資を受ける。注意すべきなのは、漢口にある茶桟に運ばれる前の茶の流通経路において、外国銀行や外国商人はほとんど介在しておらず、その融資は伝統的な金融機関が担っていたことである。一方、輸出金融について、輸出品を買付けるための資金のほとんどは一八六〇年代以降外国銀行によって提供されるようになった。

図3　山西茶票の流通過程



注記：→山西茶票の流れ
≫銀錠の流れ
①②③④は茶票取引の順序

茶の出荷期になると、在漢口の諸外国銀行支店には巨額の資金需要が生じてくる。その資金の多くは上海で調達され、汽船での現金輸送とともに、山西票号によっても送金される。

(一)「茶票」取引の仕組み

茶出荷期における山西票号の送金手形の取引の仕組みは、上海で発行された英字新聞 *Celestial Empire* 紙の記事で詳しく説明されている。またその送金手形の流通に関する概念図は図3に示されている。

まず、同紙（一八七六年一月二〇日付）には次のようにしるしている。「毎年旧正月五日ごろ、上海諸銭荘は、外国銀行に売り込むつもりで、総額約一〇〇万から一五〇万に上る山西票号によって発行される四〇日間の漢口宛手形を売り捌く。今までこのような為替手段が諸銀行から大いに追い求められてきた。」また、その翌週の記事（一八七六年一月二六日付）は次のように書かれている。「上海の諸銭荘は山西票号から〇・三四%のプレミアム付で漢口宛の四〇日後払い手形を購入し、それを外国銀行に〇・一%から〇・一八%のプレミアムで再販売すると見られる。この取

引は銭荘にとって明白な欠損があるように見えるが、その理由は簡単に説明できる。銭荘はそれを買い入れた銀行から直ちに手形の対価を受けるが、票号に対してはその手形が漢口で満期になる日にその対価を支払う。従って、手形が流通している間に銭荘はその資金を運用できるのである。こういった手形は、ヨーロッパにおける融資手形と類似点がある。この制度は長江が外国貿易の開港場になって以来行われてきた。また、大いに利用され、安全な融資制度と思われる。その目的は言うまでもなく茶の出荷に資金を用意することである。山西票号は、手形が満期になった時に漢口で支払う。手形の期限が常に書き換えられ、茶取引が開始する前後に支払われるようにしている。中国人の茶仲買商に支払われる銀錠は、積荷委託貨物を担保に振出されたロンドン宛手形を外国銀行に割引いてもらった外国輸出商人の手を経て、より多くの茶を買付けるように農村に流入する」。

このように、茶票取引は、一八七〇年代半ばに至ると、すでにかなり発達しており、外国銀行をはじめ、銭荘や山西票号などすべての上海金融市場にある金融機関がその取引に関わりを持っていた。また、前に見たように中国人の茶仲買商人は、茶を仕入れるのには商品価格の三割前後の資金しか必要としないので、一番茶を売却して受け取った代金を二番茶などの仕入れに当てることになる。従って、茶票取引は漢口での茶貿易の発展にとっても大変重要であった。

山西茶票の流通過程では山西票号と外国銀行とは直接取引きせず、上海の銭荘がその両者間の仲介的な役割を果たすという特徴がみられる。上海の銭荘はアヘン戦争以前にすでに上海に存在していた。一八五〇年代半ばから、上海銭荘は中国商人と外国商人間の取引を仲介するようになった。中国商人が輸入取引の際に上海銭荘に一〇日後払いの約束手形、荘票と呼ばれるものを振り出してもらって、これを借り受けて外国商人へ支払う習慣が定着していた。上海銭荘の資本金は数万両にすぎないが、輸入品を売買する双方がお互いの信用状態を知らないことから、荘票が商業取引に不可欠なものとなったのである。

上海銭荘と外国銀行との間の関係は一八六〇年代末頃に構築されたと言われている。一八六四年に在中国の外国商人によって設立された香港上海銀行が一八六九年になって銭荘によって発行された荘票を外国商人のために取立てる

という業務を始めた。それまで、在上海の外国銀行は荘票を通貨として見なさず、外国商人が外国銀行の銀行手形を購入する場合、銀で支払わなければならなかった。[21] そのため、外国商人は商品を売ってから荘票が満期になるまでの繋ぎ資金を獲得する要請が強かった。また、同じ一八六九年頃、香港上海銀行は各地の銭荘への短期資金供与の業務をも導入し、手元にある遊休資金に運用の道を与えた。[22] 外国銀行から融資を受けた銭荘は、その資金を内地での輸出品買い付けに利用して、中国輸出貿易の拡大に役立った。

他方、山西票号と上海銭荘とのかかわりもやはり一八六〇年代に確立されたように思われる。上海に進出した諸山西票号は、太平天国の乱をきっかけに、清政府官僚から大量の預金を集めた。山西票号は、この資金をもって上海銭荘に対して長期融資を供与した。この安定した資金供給源は、銭荘の上海金融市場での勢力を助長し、一八七〇年代において山西票号の融資は銭荘の運転資金の半分を占め、常時二〇〇万両を超えたといわれる。[23] しかし、山西票号は、国内の送金業務を開拓するために、上海銭荘を窓口にして送金手形を販売した。「茶票」を含めた山西票号の送金手形は、現金あるいは荘票でその代金を支払うことができる。[24] それに対して、送金手形は満期になった時点で手形の代金を支払うので、上海銭荘はその売却によって運転資金を得ることができる。そうしたことから、山西票号と上海銭荘間の取引関係がいかに密接であったかが示されている。このように、上海銭荘は、中国商人と外国銀行間の仲介者だけでなく、山西票号と外国銀行間の仲介者でもあり、「茶票取引」における不可欠な役割を果たしていた。

山西票号が茶貿易送金業務を掌握するようになったのは、彼らが上海と漢口両地だけでなく、長江流域全体に重要な役割を果たしたからである。漢口における山西票号の役割についてイギリス議会資料[25]の中国漢口に関する商業報告では次のように評価している。

> 漢口と他の地方間の取引について、裕福な山西票号はそれに参加してわが国にある諸銀行とほぼ同じように重要な役割を果たしている。湘潭に運ばれる貨物のほとんどは、山西票号の手形によって決済され、湘潭の漢口における仕入れ代理店はまったく現金を持たない。……揚子江貿易について彼らの主要な本店は太平天国の乱以来上海に移された。これによって四川の業務もここから上海に移された。金融機関からの融資は

後者のほうでより簡単しかも良い条件で獲得できる。漢口と四川との間では貨幣の移動がほとんど見られない。従って、綿及び外国商品に対して地方間交易の収支は恐らく一次産品で維持されるだろう。内国為替レートが絶えず大幅に変動するため、過剰な貿易を抑制することができた。こういった山西票号の資産を推測するのは難しいが、中国人はそれに大きな評価を与えている。

上海と漢口間の「茶票」業務は山西票号にとって、非常に重要な分野であったことは、山西票号によって独占的に行われたいま一つの重要分野である官金送金業務と比較すると明らかである。表2に見られるように、一八七〇年代から一八八四年に至るまでの一五年間にわたって、山西票号の官金送金業務は年間平均が二一〇万両から二九〇万両の間にある。それに対して、漢口・上海間の茶貿易にかかわる送金額が年間一〇〇万両から一五〇万両に上り、その半分近くに達している。さらに、清国政府がたびたび民間の金融機関による送金を禁止する命令を出したので、官金の送金業務はきわめて不安定なものであった[26]。山西票号にとってより安定的な経営基盤を作るためにも、茶貿易送金業務を掌握することが必要であったと思われる。

外国銀行の上海から漢口への送金のうち、茶票を利用する比率がどれくらいかは確かではない。漢口からの茶輸出は年間七〇〇万両前後であると推計されるが、表3にみられるように、出荷期直前の四、五月において諸外国銀行の上海にある銀所有高は全部で三〇〇万から四〇〇万両台に上り、その内、茶を購入する外国商人への融資額は約三〇〇万両と見られる。先ほど見た *Celestial Empire* 紙の記事に書かれているように、全体で一五〇万両が山西茶票で送

表2　票号の官金送金業務

（単位：1,000両）

期　間	金　額	年間平均
1861－1865	3,510	702
1866－1870	10,316	2,063
1871－1875	10,595	2,119
1876－1880	14,728	2,946
1881－1885	12,096	2,419
1886－1890	14,377	2,875
1891－1895	24,993	4,999
1896－1900	19,560	3,912
1901－1905	50,971	10,194
1906－1911	58,501	9,750

出所：『山西票号史料』、pp. 135-136、250-251より作成。

表3　諸外国為替銀行の上海での銀所有高

日　付	銀錠（千上海両）	銀貨（千ドル）
1870年5月6日	3420	2900
1871年5月6日	4395	1210
1872年5月18日	4585	2230

出所：McLean Papers, 11May, 1871, 20May, 1872

金されるとすれば、外国商人の茶購入資金のうちの約五割と推計することができる。

(2)「茶票取引」の起源

ここで取り上げている上海、漢口間の茶貿易にかかわる大規模な送金手形の取引は、生糸など他の貿易分野や、他地域には見られなかったようである。この「茶票」取引は、先に見た漢口での山西商人の対モンゴル・ロシアの茶貿易において山西票号によって行われた送金・融資業務に原型を見ることができるのではないかと考えられる。

山西商人と山西票号間の「茶票」取引の具体的なあり方は、一八六一年に当時諸票号のうち規模の大きかった日昇昌の本店（山西省平遙店）によって出されたいくつかの書簡[27]によって明らかになる。

本店から漢口支店宛の書簡（一八六一年二月三日付）には、次のように書かれている。「来春、（湖南省の長沙）、湘潭宛の茶票は、一〇〇〇両当たりに七〇両のプレミアムが付き、少し経ったら、もう少し上がるかもしれない。多分来年張家口とわれわれの所（山西省平遙）から茶を買い付けに行く商人が少なくないだろう。南のどの票号も手元資金がないので、来春我々の所が取り扱う茶商人の手形も恐らく大きく値上がりするだろう。もしプレミアムがよければ、平遙店は明日漢口宛手形を数万両売りたいと考えている」。

山西票号は、漢口で必要になる資金を広州で調達しようとした。本店から広州支店への書簡（一八六一年三月四日付）には、「広州店について、信頼できる（取引先の）商店を選んで（こうした商店によって振り出された）湖南省及び湖北省宛の受取手形を買付けて茶票の資金を集めてください」と書かれている。

また、約二ヶ月後の本店から漢口支店宛の書簡（一八六一年四月七日付）には次のように書かれている。

われわれ（諸票号）が茶票と引き換えるために備えた銀錠は今のところ全部で五〇万両、六〇万両である。ただ元豊玖、蔚泰厚の両票号は、手元資金に貸付されている資金を加えれば、それぞれ一〇万両を持っている。その他の諸票号はそれぞれ五万両から七万両、あるいは二万両から三万両を持っている。わが票号の貸付は銀二万四〇〇〇両と銅銭一万九〇〇〇吊となっており手元資金が一万六〇〇〇両余りである。

ここで、票号の主な業務である国内送金業務は貸付業務と結び付けながら展開され、湖南省に必要な資金は内国為替手形の売却によって賄い、密接な経済関係を持つ地域間の多角的決済がすでに初歩的に形成されたことが示されている。

(3)「茶票取引」を導入する外国銀行

「茶票取引」の導入は外国銀行側の事情に大きく関わっていた。一八五〇年代から六〇年代前半、上海に進出する外国銀行が急増し、一八六五年には六つに上った（表4を参照）。諸外国銀行は、中国、イギリス、インド間のいわゆる三角貿易にかかわる為替業務を中心に経営を展開した。為替業務分野において諸銀行間では激しい競争が繰り広げられ、一八六二年に開港場として開設された長江流域まで及ぼされた。一八七〇年代にはすべての外国銀行が漢口で業務を展開した。

一八六三年、チャータード銀行は他の外国銀行よりいち早く漢口に進出した。だが、すでにこの段階では輸入品の流通を掌握した中国商人は商品を上海で仕入れ、そこから漢口に運び、その金融が両地の伝統的な金融機関に依存していた。欧米商人による漢口への直接輸入が行われないため、外国銀行の銀行送金手形への需要はほとんどなかった。漢口での外国商人を対象とする融資業務は、茶貿易という分野に限られていた。[28]

諸外国銀行の漢口代理店はすべて上海支店によって管轄される。銀行によっては、漢口店の規模はきわめて小さく、例えば、後に見るように、マーカンタイル銀行は漢口にずっとスタッフを駐在させないで、茶の出荷期には、行内での地位において上海支店支配人に次ぐ会計士を派遣する。漢口店の資金源は預金と上海支店からの支店間貸越によって構成されるが、漢口で積極的に預金を集める香港上海銀行の場合でさえ、漢口代理店の貸借対照表での負債総額の半分は当座預金を含む預金が、後の半分は上海支店からの支店間貸越が占める。[29] 上海支店は、茶の出荷に備え、多くの現金を用意しなければならない。上海支店と漢口代理店との融資関係は、香港上海銀行上海支店の帳簿によって示される。図4は一八七二年に同行上海支店の手元現金高と漢口代理店に対する債権の月間の推移を示したものである。茶出荷期になると、上海支店はその必要とする銀資金を海外から輸入して、その一部を漢口に送金する。上海

支店から見れば、漢口への送金、すなわち対漢口店の貸越が増えれば、漢口店への債権が増えていく。しかし、出荷期以外には、上海支店と漢口代理店との間では資金がほとんど流れていない。

表4　諸外国銀行の上海・漢口進出

銀行名	設立年次	本店所在地	上海支店設立年次	漢口支店設立年次
オリエンタル銀行	1842	ロンドン	1847	1870年代初頭
アグラ銀行	1833	ロンドン	1858	1870年代初頭
マーカンタイル銀行	1854	ロンドン	1854	1866年以前
チャータード銀行	1858	ロンドン	1858	1863
パリ割引銀行	1848	パリ	1860	1870年代初頭
香港上海銀行	1864	香港	1865	1868

出所：漢口支店の設立年次に関しては、Compton Mackenzie, *Realms of Silver: One Hundred Years of Banking in the East*, London, 1954より作成。その他に関しては石井摩耶子『近代中国とイギリス資本』（東京大学出版会、1998年）p.139。

諸外国銀行の上海支店と漢口代理店間の資金関係が、漢口の為替業務のあり方を規定した。漢口店の主な業務は在華外国茶商人が持ってきた上海宛手形やロンドン宛手形を現金で買い取ることである。一部の商人は外国銀行によって提供されるパッキング・クレジット（Packing Credit）を利用する。すなわち、外国銀行が外国輸出商に一定の信用枠を金利八%前後で設定し、その枠内での銀行からの貸越を認める。輸出商は買付けた輸出品を担保に小切手を振り出す。その商品は公共倉庫に限らず輸出商人自身が所有する倉庫に入れてもかまわない。その小切手を受け取った中国人商人はそれを外国輸入商の支払い承認書、保険書類などをもって外国銀行に対して手形を売却する。[30] パッキング・クレジットそのものは当時として斬新な融資方法であり、その出現は輸出品の取引決済制度をめぐって中国商人・外国商人がそれまでの対立[31]を解消するために外国銀行によって提示された妥協案と思われる。

為替業務の分野において、手形の価格が最も重要な要素となる。諸外国銀行にとって、巨額の資金をいかに安く上海から漢口に送金することができるかが大きな課題となる。諸外国銀行のうち、いち早く山西票号の送金手形を利用したほうが銀錠を運送するより安いということに気付いたのは香港上海銀行である。同行は、先に述べたように、伝統金融機関である上海銭荘との取引関係を作り上げることにも、また、山西票号の送金手形の利用を導入することにも、両方においてパイオニア的な存在であったということができる。同行上海支店支配人は書簡の中で次のように述べた。「他の銀行はそれをあまり利用しない。というの

は彼らは中国手形〔山西票号の送金手形〕の安全性を懸念しているからです」[32]。伝統金融機関との取引は、コストの側面だけでなく、情報面でもメリットが大きかったようである。例えば、香港上海銀行は、山西票号から中国各地の銀市場に関する情報を受けることによって、他の外国銀行よりも中国の金融状況を把握できたということもしばしばであったようである[33]。香港上海銀行は一八七〇年代にすでに上海金融市場に優位を占めていた。表5に見られるように、一八七二年五月、諸外国銀行上海支店が輸出品の出荷期に備えた資金のうち、同行が全体の三割以上を占め、諸銀行の間で最も高い割合を持っていた。同行の動向は、他の外国銀行の山西票号の送金手形の利用を大きく左右したといえるだろう。

一八七四年、マーカンタイル銀行の内部報告書[34]でも山西票号の送金手形を利用する必要性を指摘している。

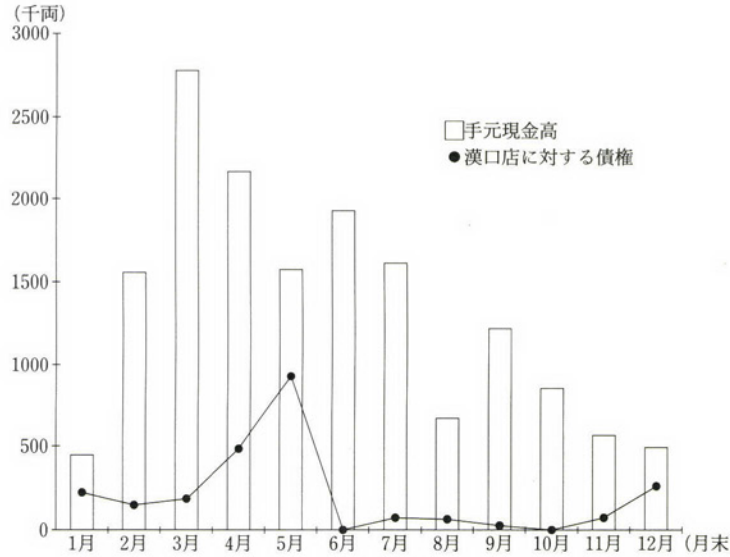
> 漢口支店は過去二年間上海支店の損失の原因であり、恐らくこれからもそうである……われわれの経験に示されたように、銀地金をそこに運ぶコストが上海と漢口間のレートの格差をほぼ呑み込んでしまうことを見ると、われわれが資金をより安く運送できなければ、会計士を出向させることは役立たないだろう。上海で行った調査に基づいて、私はこの目的で一流山西票号の手形を適度に買うことに同意する。

(4)「茶票制度」と上海金融市場

「茶票」取引の重要性は、一八八三年に上海が金融恐慌を起こした後に、茶票取引が中止になったときにも示されている。上海で発行された新聞ノース・チャイナ・ヘラルド紙（*North-China Herald*）一八八四年四月九日付はそれについてこう報道している。

> 上海金融市場は、今度の輸出品の出荷期に、一〇年あるいはそれより以前のときの状況に、多分いくつかの重要な点で類似するだろう。諸為替銀行が、茶出荷期の業務に資金を提供するために、諸中国金融機関の手形〔山西票号の送金手形〕を利用して巨額の資金を漢口に送金することが広く行われるようになる前に、上海からの銀錠輸送は近年と比べてはるか大規模なものであった。……諸利点の中では、特に漢口宛手形のために支払われた銀錠の一部が上海に保留され、諸中国金融機関〔銭荘〕の運営に関わる資金を提供するとい

図 4　香港上海銀行の上海・漢口両店間の資金移動（1873 年）



出所：香港上海銀行上海支店の各貸借対照表より作成。

う点がある。しかし、今度の出荷期には諸為替銀行が山西票号の漢口宛手形を購入しなかった。それは以前こういった取引を仲介したローカルな金融機関〔銭荘〕が今年になって喜んで引き受けないあるいは引き受けられないからではないかと推察される。山西の金融機関〔山西票号〕や資産家も業務をできるだけ制限している。過去多くの出荷期にわたって漢口宛手形の利用によって行っていた資金輸送は、今年には銀錠輸送になることが確実であろう。これは現地での通貨を相当に減少させるだろう。その結果、今年の後半には商業が深刻な被害を被るかもしれない。というのは、ここから漢口に送られた銀錠の大部分は、漢口を離れないか、あるいは茶生産地域に送られるかになると予想されるからである。したがって、上海の銀錠が山西票号の送金手形取引が継続的に行われる場合より少なくなるであろう。上海には出荷期において貿易のための鋳造貨幣がつねに足りない。漢口に必要な資金の大部分が銀錠を手形で送金する方法で提供されない場合、商人が好まないほど貨幣の価値がより大きく、より頻繁に変動するだろう。漢口の茶取引の大部分は六

表5　外国銀行別の上海での銀保有高（1872年5月18日）

	銀錠（千上海両）	銀貨（千ドル）	貸付（千上海両）
オリエンタル銀行	930	700	200
アグラ銀行	600	50	
マーカンタイル銀行	800	1200	
チャータード銀行	165	130	
パリ割引銀行	440	200	
香港上海銀行	1400	500	830
合計	4335	2780	1030

注記：ここでの貸付は主に中国人に対する短期貸付を指している。
出所：McLean Papers, 20 May, 1872

月三〇日に終了するであろう。その時に為替銀行によって保有される資金が必要になる。商人たちは、輸出手形を販売して手に入れる資金をその日まで船に積まれてきた茶に十分支払うために使う。この期間に輸入品の取引が増えれば、商人への貨幣供給が増大するだろう。しかし、このような見通しはあまりない。巨額の銀が受け取られる見通しもあまりない。……現在銀輸入の誘因がそれほどなく、ここの流動資金の深刻な減少が見込まれる。それに伴って、諸為替銀行は今年下半期の業務への貨幣供給の多くをロンドンあるいはサンフランシスコに期待する必要が出てくるかもしれない。銀の採算が不確実であるため、銀を輸送するリスクを取りたくない銀行もあるだろう。資金調達についてここで銀行手形の販売を当てにすれば、為替の水準にかかわらず、商業がかなり妨害され、頻発するパニックでほぼすべての売買が停止に追い込まれ、貨幣の価値の頻繁な変化などがかなり確実に見られるのである。これは昔、漢口の為替業務が今度の出荷期と同じように融資された時の状況であった。

このように、これまで貿易の拡大によって急成長した上海金融市場は、貿易による貨幣需要の季節性に対応するため、外国為替銀行による銀輸入に依存しながら、伝統的な金融機関である山西票号の地域間決済業務によって貨幣価値の変動を緩和していたのである。

しかし、一八八三年に上海で起きた金融危機を契機に、上海銭荘に対する長期融資である二〇〇万両を一斉に回収した山西票号は、上海銭荘への信用供与を大幅に縮小し、融資業務を漢口に集中させるようになった。それに伴い、山西票号の上海金融市場における存在感も急速に小さくなった。

おわりに

山西票号の上海進出によって、上海は山西票号のネットワークに組み入れられ、従来長江流域の商業中心であった漢口との間で新たな結びつきを構築することができた。こういった上海と長江流域間の新しい地域経済関係は、山西票号が持つ広範な地域間決済に必要なノウハウによって大きく促進された。

しかし、山西票号の経営を取り巻く環境は、一八九〇年代以降、大きく変化した。一八九五年以降、政治借款・賠償金などでの返済・支払いが急増する中で、資金が上海向けに流れていき、上海に集中するようになり、各地方では資金不足などいろいろな困難にぶつかり、一連の金融危機が起きた。諸地方の金融市場の混乱は、山西票号の経営を悪化させる要因の一つとして考えられる。

一方、国内送金業務の分野には、新設の近代銀行のほか、各省地方政府によって設立された官銀銭局や、急増する外国銀行、経営基盤を拡大しつつあった上海銭荘などの参入によって、激しい競争が繰り広げられた。

西洋の銀行経営方法を取り入れた近代的な株式銀行が一八九七年以降続々と設立され、一九一一年に至ると、開設された株式銀行が一七に上り、資本高、預金高、貸付のそれぞれの合計も三五〇〇万ドル、一億三千五百万ドル、一億二千七百万ドルとなっていた。[35] これに対して、一九一三年において一四の票号の預金高、貸付高の合計は、三四七〇万ドルと四三七六万ドルとなっていた。[36] 後発であったにも関わらず、近代的な株式銀行が金融市場の新しい勢力として票号に大きく水をあけた。これまで慎重に業務を展開してきた諸山西票号は、近代銀行へ転換しようと模索したが、[37] 結局多くの票号はそれを実現することなく、金融市場から姿を消した。

とはいえ、山西票号は、本論文に見られるように、一九世紀六〇年代から八〇年代までの時期において過渡的ながら上海金融市場において非常に重要な役割を果たしたということができよう。

(1) Linsun Cheng, *Banking in Modern China*, Cambridge Univ. Press, 2003, p.19.

(2) 例えば、最近の研究に Shizuya Nishimura（西村閑也）, the Foreign and Naitve Banks in China: Chop

Loans in Shanghai and Hankow before 1914, *Modern Asia Studies* 39, 1 (2005).

(3) 山西商人は塩業に投資する他、茶、米穀、漢方薬の人参、毛皮、銅、綿布、雑貨などの販売にも従事し、活動の範囲は中国の北部から全国に広がる。山西商人の歴史的な発展に関しては佐伯富「清代における山西商人」(『史林』六〇―一、一九九七年一月)を参照。

(4) 黄鑒輝『山西票号史』山西経済出版社、一九九二年、四六～五八頁。

(5) 黄鑒輝、前掲書、三五四～三五五頁。

(6) 中国人民銀行山西省分行・山西財経学院『山西票号史料』には官金の送金業務に多くの紙幅を与えている。

(7) 例えば、黄鑒輝の前掲書及び、『山西票号史料』

(8) ここで使われている当時上海で発行されている *Celestial Empire* や一八七〇年代半ばまで香港上海銀行上海支店支配人を務めたDavid McLeanの書簡資料はロンドン大学SOAS (School of Oriental and African Studies) に所蔵されている。また、香港上海銀行、マーカンタイル銀行に関する資料はロンドンにあるHSBCのアーカイブズに所蔵されている。

(9) 陳慈玉『近代中国茶業的発展与世界市場』中央研究院経済研究所、台北、一九八二年、九七～一〇一頁。また、「再輸出」の存在によって、各開港場の輸出統計の一部が二重に計算されたことになる。その結果、諸開港場のそれぞれの茶輸出高を合算しても中国全体の茶輸出高の数字とは一致しなかった。

(10) この部分に関してはさしあたりWilliam T.Rowe, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1789-1889*, Stanford Univ. Press, 1984, の第四章及び吉田金一「ロシアと清の貿易について」(『東洋学報』四五―四、一九六三年三月)を参照。

(11) 一八〇二年から一八四五年に至るまで、キャフタの茶貿易は量的に六倍に増加したという推計がある。William T.Rowe, *ibid.*, p.124.

(12) 黄鑒輝『山西票号史(修訂本)』山西経済出版社、二〇〇二年、一〇八～一〇九頁。

(13) 一八九五年香港上海銀行漢口支店の行内報告書では、漢口の茶貿易会社Tokmakoff &Moloazoff社に関して次のように述べている。「この会社は最も忠実な取引先であり、時折銀の無担保融資を求めるが、私の観察では同社ならそれほど心配することがない。……ここでわが行とロシアの諸会社との業務に関してまた別の手紙で説明するが、(露清銀行の設立による)来るべき競争を見込んで、安全性に見合う最大の融資を供与すべきである」(Inspector's Report, Hankow, 1895)。

(14) 「左庶子張之洞奏挽救俄約摺」(『清季外交史料』二三巻、一〇～一一頁)。

(15) 重田徳『清代社会経済史研究』岩波書店、一九七五年、二三八～二九四頁。

(16) William T.Rowe, *op. cit.*,Chap.4.
(17) 陳慈玉、前掲書、八六～八七頁。
(18) 一八七五年の海関報告、上海。
(19) 茶の生産構造に関しては、さしあたりWilliam T. Rowe, *op.cit.*, pp132-136, 重田徳、前掲書、二三八～二九四頁を参照。
(20) ただし、広東省出身の人はより多くの資金を用意しなければならない。というのは彼らは地元ほど信用されないからである。広東省出身者は中国茶貿易に大きな役割を果たした。一八四二年以前、貿易が広州だけで行われていたことにより、広東省出身者は外国市場の需要動向や茶の専門知識を持つようになった。一八六一年以降、彼らも茶貿易の仲介者として漢口にやってきた。一八六九年、湖北・湖南両省に開設された二一〇の茶行のうち、広東出身者によって経営されるのは四一であった。しかし、茶行が掛け買いをすることも多かったようである。一八六八年九月に、湖南省内の最大の茶産地である安化県においては、知県（知事に当たる）が「紅茶章程」を定めた。その第三条には支払いに関して、「行客が茶を買うときには必ず現金で取引し、掛け買いしてはいけない」という規制が書かれている（重田徳、前掲書、二七三頁）。
(21) Yen-Ping Hao, *The Comprador in Nineteenth Century China*, Harvard Univ. Press, 1970, pp.85-86.
(22) 中国人民銀行上海市分行『上海銭荘史料』上海人民出版社、一九六〇年、二九頁。
(23) 前記『上海銭荘史料』五一頁。黄鑒輝『山西票号史』山西経済出版社、一九九二年、三六～三九頁。
(24) 票号の銭荘に対する融資期間は四ヶ月をもって最長期とし、利子歩合は毎月〇・四%から〇・五%が一般的であるが、金融逼迫の際には〇・七ないし〇・八%を取ることがある（東亜同文会『清国商業綜覧』第四巻、一九〇八年、一八九～一九二頁）。
(25) British Parliament Papers, China No.12 (1870), Commercial Reports on Hankow , pp.191-92.
(26) 黄鑒輝、前掲書、二三三～二四三頁。
(27) 浜下武志等編『山西票号資料――書簡篇（一）』東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター叢刊、一九九〇年。
(28) Compton Mackenzie, *Realms of Silver: One Hundred Years of Banking in the East*, London, 1954, pp. 66-69.
(29) 香港上海銀行漢口店の預金者は、漢口租界の行政管理局や、中国人の官僚、商人、在華外国企業が含まれている（Frank H.H.King, *The History of the Hongkong and Shanghai Banking Corporation, Vol.1: The Hongkong Bank in Late Imperial China, 1864-1902: On an Even Keel*, Cambridge Univ. Press, 1988, pp.504-505.）。
(30) King, *ibid.*, pp.504-505.
(31) 輸出取引制度をめぐる対立については、本野英一『伝

統中国商業秩序の崩壊――不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会、二〇〇四年、六一～七六頁を参照。

(32) 香港上海銀行上海支店支配人マクリーン（David McLean）は一八七一年にすでに山西票号の送金手形を利用し始めた。香港本店宛ての書簡の中で、彼は次のように書いている。「私はCope〔漢口店支配人〕に安い資金、すなわち一ヵ月以内に満期になる山西票号の手形、を供給している」（McLean Papers, 2 June 1871）。浜下武志は外国銀行と山西票号間との取引関係を一八八〇年代後半に始まったと指摘しているがそれは正確ではない（浜下武志『中国近代経済史研究――清末海関財政と開港場市場圏』東京大学出版会、一九八九年、四一七頁）。

(33) McLean Papers, 12 Jan, 1872.

(34) マーカンタイル銀行ロンドン本店のキャンベル（Rob Campbell）の上海支店長宛ての書簡。Rob Campbell on Shanghai Branches to Manager of Shanghai, MB Hist 460.

(35) Linsun Cheng, *op.cit.*p.34.

(36) 前掲『山西票号史料』四九四～五〇二頁。

(37) 前掲『山西票号史料』五一〇～五一八頁を参照。

（シウ　マンハン・大阪経済大学非常勤講師）